〔論説〕

九州伝統織物産業の生成と展開

高　向　嘉　昭

1．はじめに

わが国の伝統的織物産業は，現在大きな転機に立たされている。消費構造の変化による構造的不況に悩まされ，或いはＮＩＥＳ製品の輸入増による売上の減少，更には後継者不足などといった様々な問題を抱えながら，何を目指すべきか，どうすれば衰滅から免れることができるのか，といった苦難な道の打開を迫られているのである。このままの長期低落傾向が続けば，長い伝統の歴史を持つ織物産業も遂にはこの世から消え去り兼ねない切羽詰まった状態に立たされており，当然のことながら，このような状況の中で，伝統的織物産業の各産地は生き残りをかけて生産技術の革新や新商品開発に向けて懸命の努力が続けられている。

今さら言うまでもなく，全ての事象は歴史の中に存在し，その過程で因果法則が作用している。現在の姿は過去の歴史の必然的帰結であり，伝統的織物産業もその歴史的法則から免れることはできない。当面する閉塞性を打破し，新しい展望を開くためには原点に立ち返り，そこから再び歴史を辿ることによって因果関係を探査し，現在生じている問題点の因って来るところを明らかにすることが必要である。

そこで本稿では筆者の生まれ育った九州地域の伝統的織物産業について，生成と展開の過程を振り返り，それらを通して，現在苦境に立たされてい

る伝統的織物産業の歴史的必然性を探り，将来への手掛かりを得たいと思う。なお，ここでは九州の伝統的織物産業の中から博多織，久留米絣，本場大島紬の三つを取り上げることにした。限られた紙数の中で，全てのものに触れることは到底不可能であり，全てを取り上げることが不可能ならば代表的なものを，ということでこの3者に絞ることにした。本場大島紬は高級着尺地，久留米絣は日常衣料品，博多織は和装に欠かせぬ帯地というように，それぞれの分野を代表し，また，いずれもわが国織物産業の中で大きな地位を占めているのがその理由である。

2．博多織等の生成の歴史

(1)　博多織の源流

今日「博多織」と呼ばれている織物の起源については，諸説あって定かでない[1)]。通説では，建仁2年（1202）筑前国博多の津に生まれ嘉禎元年（1235）博多承天寺の開祖聖一国師に随って渡宋，6年間滞在の後，織物，朱焼，箔焼，素麺，麝香丸など5科の製法を修得して帰国し，その技術を後世に伝えて，弘安5年（1282）この世を去ったという満田弥三右衛門なる人物が，博多織の始祖[2)]として伝えられている。

しかし，古来，有名な地方産業には，それを由緒あるものにするため，その起源をできるだけ古く，しかも，内容的に各種の粉飾を施したものが，あたかも真実であるかのように語り伝えられていることが多く，この満田弥三右衛門説もその伝と見て差し支えないようである。真実は『石城遺聞』に記されている如く「今の博多織の起源は不詳」[3)]ということになろう。それでも，諸種の文献を総合してみた時，博多織の起源はかなり早い時期にまで遡ることができるようである。

ところで，博多織は「献上博多織」と「献上」の冠詞をつけて呼ばれることが多いが，それは慶長5年（1600）黒田長政が福岡の領主として入国した際，長政の入国に慶意を表して献上された博多唐織に目をとめて，これを幕府への献上品と藩の軍旗に指定し，育成したこと[4]によるものである。こうして博多織を献上品として指定した福岡藩はその品質の優秀性と稀少価値を維持するため，他藩のように積極的にこれを奨励し，藩財政の有力な財源としての産業にまで育成することを考えなかった。むしろ献上品としての稀少価値と品質維持のため逆に生産や販売を制限したので，博多が相当の規模を持つ機業地として発展するには，明治維新による体制の変化をまたなければならなかった。

(2) 久留米絣の生成

備後，伊予と並んで，かつては三大綿絣の一つに数えられていた久留米絣は，今から約200年以上隔たる元明8年（1788）に，久留米市通外町の米屋（橋口屋）の娘として生まれた井上伝（明治2年没）によって創出されたと言われている[5]。

ある日洗い晒した着物の所々が褪色して白い斑点になっているのに目を留めた伝が，その斑点の部分を模様にして布を織ってみることを思い立った。洗い晒した布を解きほぐし，それを種糸にして，斑点の通りにその箇所を絞り，藍汁で染めた。更に乾燥させて絞りを外し，機で織ってみると，斑点の散った目新しい織物ができた。彼女が12，3歳の頃のことであった[6]。伝は，これに更に工夫を加えたものを「加寿利」と名付けて売りに出した。市場に現れた新柄の加寿利は，忽ちにして霰織，霜降織などと呼ばれ，競って買い求められた。そして，伝が15歳の頃には既に「お伝絣」の名が藩内に広がり，数名の弟子を抱えるほどであったという。

伝は，井上家に嫁いでからも絣織りを続けた。彼女が40歳になった頃には，400余の婦女子がこもごも指導を受け，こうして機業としての絣織は遂に久留米を中心とする南筑後地方に，確固たる基礎を築くことになったのである。この機業は老幼男女を問わず，ことに婦人の手仕事として最適であったので，久留米藩主の有馬氏も「開成方」なる役所を置いて，大いに一般の家庭へも奨励した。もっとも，当初はこのような仕事は，下賤の輩の渡世のための営みであるとして，武士の家庭では毛嫌いするところが多かったが，幕末における下級武士階級の生活苦のために，慶応の頃からはそうした家庭でも，婦女子の内職として機業に従事するようになり[7]久留米絣はますます発達し，生産は増加の一途を辿った。

(3)　本場大島紬の起源

博多織と同様に本場大島紬の起源についても幾種類かの説が存在する。しかし，通説としては新撰日本物産年表に「将軍足利義植の大永一年(1521)に琉球久米島の人（堂の大親）支那に渡り，織物養蚕の法を習い帰りて之を島民に教ふ，而して其後七十四年を経て，後陽成天皇の文禄四年に至り，琉球各村紡績織物場を創立す」[8]とあり，当時奄美大島と琉球との交流が緊密であったところから，これが奄美に伝わり大島紬の元祖となったのであろうと言われている。

この大島紬という文字が記録に現れた最初のものは，享保五年（1720）薩摩から大島・喜界島・徳之島・沖永良部島への下し文で「(前略）一、右役々ノ外ハ木綿着用致絹布並紬迄モ着用間敷候」と，役人以外の者が紬を着用することを禁止したものがそれだと言われている。享保年代は，久米島で紬が生産されるようになって百年ほど後のことであるから，当然，この頃には紬の製法が，既に奄美の各島に伝わっていたと見て差支えない。

3．伝統的織物の産業化への展開

博多帯および大島紬は，幕府への献上や他藩への進物あるいは藩への上納物として利用されたので藩は稀少価値と品質保持のための生産制限を行った。博多織の場合は「織屋株」なるものを設けて少数の限定された織屋だけにそれを許し，一般の自由な製織を禁じたのである。

一方，これらの着用についても，幕府は寛永五年（1628）の老中布告を始め，度々の布告で，百姓町人への絹，紬など高級品着用を禁止し，また染色についても紫や紅染を禁止するなど徹底した制限を加え，これを受けて各藩でも領内に衣服着用についての布令を出している。先の享保年度の大島紬禁止令もこれを受けてのことと思われる。従って博多織と大島紬の場合，本格的に産業化するのは，当然のことながら，こうした制約の取れる明治以後になってからのことである。

一方，久留米絣の場合は，それが普段着であり木綿製であったことで，何ら制限を加えられることなく，むしろ藩によってその生産が奨励されたほどである。また，上述のように染色の身分制によって農民には華美な染色が禁じられ，下着から上着，寝具に至るまで紺一色の衣服を着用するように命令されていたので，久留米絣を始め他の絣織に見られるような木綿の藍染が一層発達することになったのである[9)]。

もっとも，久留米絣の場合は藩政時代から産業としての展開は認められるが，それが全国的市場へと本格化して行くのは，やはり明治に入ってからのことである。

もちろん，博多織や大島紬にとって藩政時代の制約がとれたとはいっても，その行く手は決して平坦なものではなかった。明治5年太政官布告に

よって礼服に洋装を採用する原則が確立されたことにより，明治7，8年頃までは世をあげて洋服を謳歌する有様であった。こうした洋風模倣の大勢は各機業地を混迷に陥れ[10]，藩政時代から伝統的に男帯地，袴地の生産を主流としてきた博多織もその例外ではなかった。

ところが，明治10年の西南戦争を契機として，博多織業界は俄に活況を呈するに至った。征討総督有栖川宮の本営が福岡に設置され，軍人，軍属の去来が頻繁になって「戦争景気」を現出し，博多織の需要が増加したのである[11]。当然，これに刺激されて織戸数や織工数が急増し，その後景気変動による生産量の増減はあったものの産業としての基礎は確立され，以後順調に発展して行った。

西南戦争は久留米絣にもまた大きな影響をもたらした。博多と同じように，軍人軍属のこの地方に入り込む者が多く，これらの人々はかねて評判のある久留米絣を家郷への土産物にと争って買い求めた。ところが，悪徳商がこの機に乗じて粗製品を売りつけ，不当不正の利益を貪ったので，久留米絣は悪評を天下に晒すことになった。

こうして天下に広がった悪評を何とか払拭しようと有志が立ち上がり，名誉挽回に乗り出したので，奸商は漸く姿を消し，信用も徐々に回復された。更に，その後明治19年（1886）新たに久留米絣同業組合を創立し，この生産に従事するものは全て組合に加入させ，規約を守らせることにしたので，絣業界の発展は軌道に乗り，年産30万反から40万反，更に50万反へと飛躍的な増加をみせ，全国へ販路を広げるに至った[12]。

大島紬の場合は当然のことながら，その地理的関係からこうした西南戦争の直接的影響は及ばなかった。大島紬が産業化の動きを見せるのは，遙か遅れた後のことである。

4．生産量の推移にみる各産地の特質

さて，織物業としての生成並びに産業化の過程は上に見た通りであるが，次にこれら3産地の生産量の推移を通して各産地の特質，或いはその時々の経済的・時代的背景などを見てみることにしよう。

(1) 明治初期から中期時代

まず3産地の中で最も早い年代からの記録が残されている博多織の場合，明治元年から20年頃までにかけては1～5万本程度の生産量で横ばい状態が続いている。古くから博多織としての知名度はあったものの，市場的にはまだ初期段階にあったと言ってよい。これに対し久留米絣はその生産量等が記録されるようになった最初の年の明治19年において，既に40数万反の生産量が見られ，これ以前から産業として十分に成長していたことを知ることができる（第1図参照）。

大島紬はこの頃の確たる資料がないため，どの程度のものであったか定かでないが，後の生産量から見る限り，殆ど取るに足りない量であったと推測される。なお，この大島紬は明治の初めまでは原料糸として手紬糸が使用されていたが，明治28年頃より需要が次第に増えてくるに従い，従来のような真綿手紬糸では需要に応じきれなくなったため，練玉糸を名古屋方面より取り寄せ，これを使用しての製織が行われるようになった。更に大正4年には本絹糸製品も生産されるようになるが，なお練玉糸は昭和の初めまでは，まだ一部存続使用されていた。しかし，昭和10年頃になると原料糸は殆ど移入の本絹練糸に依存するようになった[13]。従って，この時から大島紬は，本来の意味における「紬」ではなくなり，実質的には「大島

絣」へと変質して行ったのである。

(2) 明治後期から大正時代

年間5万本程度の生産量を続けていた博多織は，明治20年を過ぎた頃から生産量が上昇し始め，明治末期には30万本となり，その後一時不況期で生産量の減少を見たものの，やがて大正10年には生産量も40万本近くに達し第1次の黄金時代を迎えることになった。

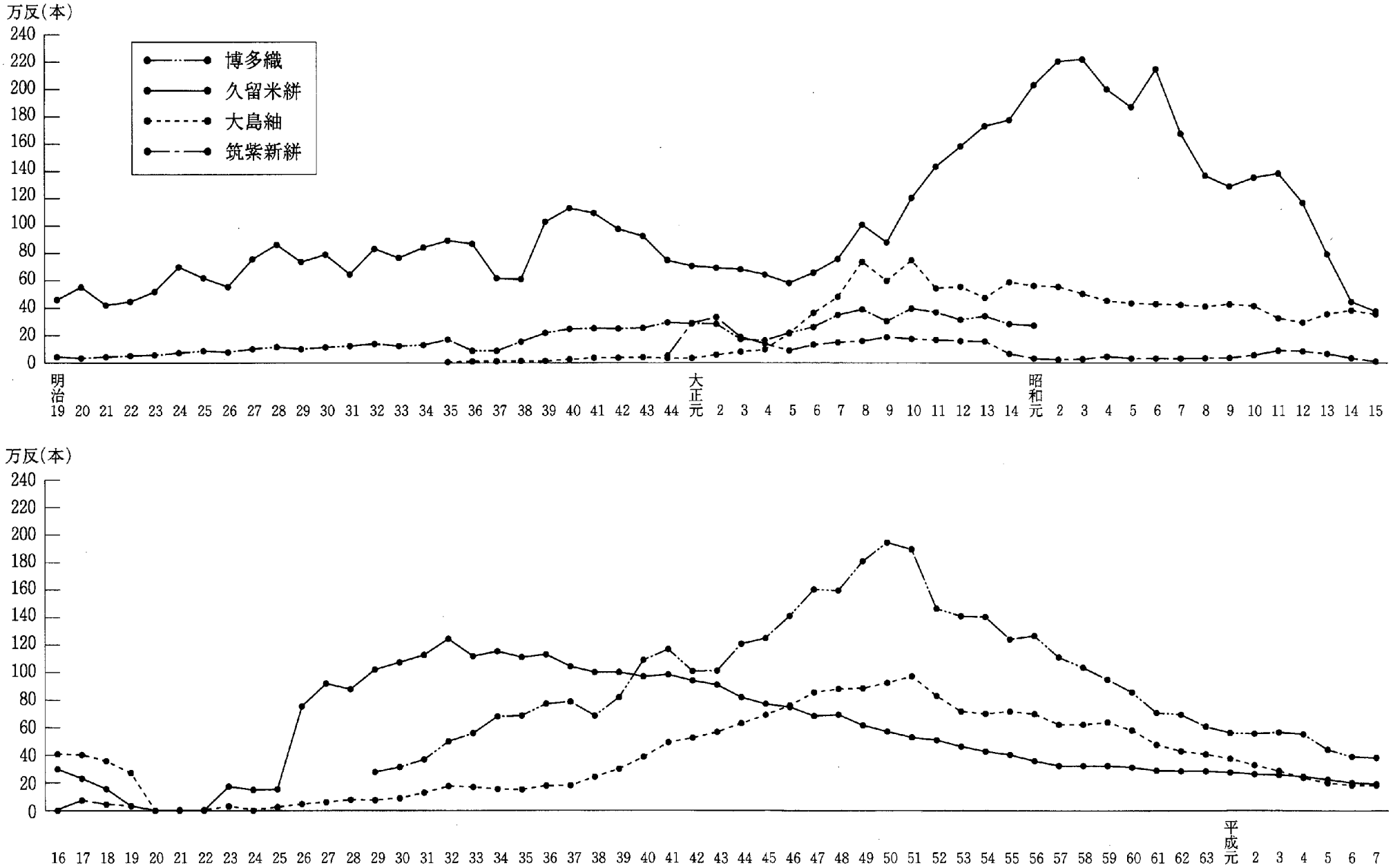
こうした生産量の増大に，明治18年博多織産地に導入されたジャガード，ドビー機がその効果を発揮したのは勿論だが，むしろそれ以上に，明治期の繁栄は，零細家内手工業の簇生の結果によるところが大きかった[14]。というのは，この当時のジャガード，ドビー機はあくまでも手機の一種に過ぎず，従って生産量の急増は，後に見るような近代的機械化による織屋規模の拡大，生産力水準の向上によるものではなかったのである[15]。

また，明治時代の博多織は，概して数百年来の伝統を継承するのに終始し，生産技術にも目立った変化はなかった。製品も従来の品目そのままで，日清戦争前後までは男帯中心であった。しかし，明治20年頃より，流行の変遷が速やかで，かつ意匠の鮮麗華美な女帯が注目され始め，明治37年には女帯が男帯の生産量を上回るに至った。もっとも，それが決定的になるのは大正時代になってからのことである[16]。

ともあれ，こうした男帯から女帯への製品転換は，女帯の製品単価が男帯に比べ遙かに高かったことから，生産金額の増加となって現れ，生産額の面で急激な変化を見せることになった。かくして博多織産地にとって日露戦争後から第一次世界大戦後の10数年間は，先の西南戦争時以来第2のブーム期となったのである。

この間，久留米絣も第1次の黄金時代を迎えている。この産地では日露

第1図　各産地における生産数量の推移



戦争後の好景気に幸いされて生産量は飛躍的に上昇し，ピーク時には110万反を越える勢いであった[17]。しかし，一方困難な問題も生じてきた。この頃輸入されてきた化学染料を使った絣の出現である。これに対処して久留米絣同業組合では板絣に限り，この化学染料を用いることを認め，それを「筑紫新絣」と称させることにし，久留米絣はあくまでも従来通りの正藍染色によることとした[18]。

更に，筑後一円にくまなく生産されてきた久留米絣は筑前国朝倉郡辺りまで製織範囲を広げ，大正2年，この地方の絣組合も包含して愈々その礎は固まってきた。その後第一次世界大戦により幾らか伸び悩んだ嫌いはあったが，大戦終了を契機として絣の生産は昭和初期の最盛期へと突入して行くのである[19]。

大島紬にとっても，この時代は特筆すべき時代であった。明治時代はまだ一地方の単なる織物業というに過ぎなかった大島紬も，大正に入ってから漸く産業としてのテイクオフ時代を迎え，大正8年から同10年にかけて第1次黄金時代を現出することになった。

それは，これより先の大正3年に第一次世界大戦が勃発し，わが国の織物業も染料の輸入が困難となり大いに影響を受けたが，大島紬は奄美地域にしか産出しない天然資源（車輪梅と泥）を染料としていたので，この染料輸入の困難は，むしろ市場を拡大する絶好の機会となったのである[20]。

(3) 昭和前期（終戦まで）

大正時代も終わり昭和の年代に入ると状況は大きく変化してくる。すなわち，第一次世界大戦終結後の反動不況過程を経て，昭和初期の世界大恐慌など日本の経済界は沈滞を続け，博多織業界では，挙げて苦境に陥り，金融の逼迫，需要の減退，価格の低落，投物の続出，果ては休廃業者相継

ぐ有様となった。織屋数は大正12年の376戸をピークとして，昭和2年には235戸に減少し，生産高は，ピーク時の大正8年に比べて数量で43%，金額で44%の激減となった。この過程で，業者間の不当競争防止，品質の改善，販路の拡張を目的とした諸種の対策が講じられ，また，品種の豊富・多様化と転換を進め，特に男帯に代わってネクタイ生地の生産が著しい躍進を遂げたのが目立っている[21)]。

こうした状況は大島紬の場合も同じであった。しかし，一方，久留米絣は前二者とは違った展開を見せている。博多織，大島紬の不況を傍目に久留米絣は生産量220万反を越え，わが世の春を謳歌する空前絶後の絶頂期を迎えたのである。それは，博多織，大島紬が言わば「贅沢品」に属すものであるに対し，久留米絣の場合は学生・生徒の衣服として，また，普段着，仕事着として使用され生活に不可欠のものであっただけに，不況に拘らず，逆に需要が伸びることになったのである。勿論，それは久留米絣が堅牢であり，正藍染めという品質の良さに加え，何よりも大衆向きの低価格であったことが決定的な要因であった。

その低価格をもたらした主要因として，久留米絣が明治40年，他地区に先駆けて労賃の安い刑務所の囚人に委託生産を開始したことを指摘できる。当初，その成果が危ぶまれた刑務所生産は，人々の懸念を余所に着手以来好成績を収め，早くも2年後には，絣の反当織賃の大幅な低下を実現した。こうして他県の絣を完全に圧倒し，日本の王座を獲得[22)]することになったのである。その後，景気の低迷で一時期生産量の下落をみたが，第一次世界大戦後は再び100万反の大台に乗り，昭和2年には2,227,248反を数え，久留米絣にとって空前絶後の最盛期を迎えることになった。

久留米絣の刑務所生産に対し博多織の場合は改良織機の導入，すなわちジャガードやドビー機を設置することによって，従来までの一機2人体制

から１人体制へと人件費の低下を図ったが，省力化と大量生産を企図する本格的力織機の時代を迎えるには，なお昭和30年代まで待たなければならなかった。

大島紬は昭和に入ってから不況の影響を受け他の高級絹織物産地と同じように伸び悩みを続けていたが，特に日華事変後，戦時体制の進行と共に，職工等は徴用され，原料糸の入手も制限[23]されてくるようになると，次第に厳しさを加え，やがて昭和20年の敗戦で一切が無に帰してしまった。大島紬に限らずこの敗戦でわが国の織物産地は完全に機音を閉ざしてしまったのである。

(4) 戦後復興期から現在

戦後における各産地の展開は，共に多種多様である。到底一筆で書き尽くすことはできない。そこで，各種展開の中から特徴的と思われるものを抽出し，それを中心に記述して行くことにする。

まず，博多織では，それが本格的な復興・発展を遂げるのは昭和30年代以降になってからのことである。西陣・桐生などの産地と異なり，博多織は，正絹を生命とするだけに，経済生活の安定，高級和服の復活(和服ブーム）という波に乗らねばならなかったからである。同時にこの過程は，手機の駆逐を伴った力織機化が本格的に展開する過程でもあった。その過程で，博多織業は著しい構造的な変化を遂げるのである[24]。

博多織産地に力織機が初めて現れたのは，西陣織産地より５～６年遅れた大正13年のことであったが，諸種の事情によってその後の力織機化はさほど進展せず，本格的展開は昭和20年代の後半から昭和30年代にかけてであり，特に昭和35年以降のことであった。その進展に伴って当然工業形態も変化して行った。戦前まで支配的であったマニュファクチュアは次第に

影を潜め，「機械制工場」の発展が見られるようになったのである[25]。こうした機械化は，単位商品当たりコストの低下，具体的には労務費の減少を目的として進む[26]ことは言うまでもない。手機での製織は力を必要としたので，男工絶対主義であったが，機械化によって女工への転換が可能となり，生産費の削減を可能ならしめたのである。

力織機化と併せて，戦後の博多織における構造変化のもう一つは，正絹一本の伝統を墨守しつつ，高級品化の線に沿った品種的展開であった。こうして，昭和30年代以降の博多織は，力織機化を伴った高級品化路線を進んで行ったのであるが，この展開形態は，西陣帯地の力織化が大衆品化を目的に進められて行ったのと対置される博多織の著しい特質であった[27]。

この高級化路線は期待された通りの大きな効果を発揮したが，後になって，それはまた新たな問題を抱えることになる。そのことについては後述する。

次に久留米絣では，昭和20年代から同30年代末の間に史上第3のピークを迎えているが，その時期は同様に第2あるいは第3のピークを記録している博多織や大島紬に比べて遙かに早かった。

明らかに，それは戦後の化学繊維の開発とライフスタイルの変化によるものである。戦後わが国では，原料材としての綿花は全面的に輸入に依存していたが，このような全面的輸入依存は，ドルの絶対的不足状態にあった戦後経済では極力避けなければならなかったし，また将来の繊維製品の需要を見越すと，繊維産業による外貨使用の構造的体質を変える必要があった。そこで政府は化学繊維の開発・生産の施策を精力的に展開し，こうして従来天然繊維製品の多かったわが国の織物産業に化学繊維を素材とする製品が登場してくるようになったのである。さらに，これと重層的関連性を持ちながら，久留米絣産業に追い打ちをかけたのが，日常衣料品の

需要構造の変化であった。戦時中に強められた各種の洋式制服の着用強化と女性の社会進出に伴った洋装化の浸透[28]で，戦前には一般的衣料品として着用されていた和装品は日常生活から急速にその姿を消して行った。中でも晴着，外出着としてではなく，普段着，仕事着として着用されていた久留米絣は，それだけに，早期退潮を一層決定的にしてしまったのである。勿論久留米絣だけでなく，博多織，大島紬といえども，こうした消費構造変化の影響を免れることはできなかったが，それは遙か後になってからのことである。

最後に大島紬では「韓国産紬問題」を取り上げてみたい。

周知のように，昭和30年代のわが国経済は平均年率10％という高度成長を示したが，それは重化学工業化を軸とした設備投資主導型の特徴を持つものであった。重化学工業化の進展は，わが国の産業構造を著しく高度化し，大企業における設備投資の大型化は技術の飛躍的進歩をもたらした。高度成長は産業構造の高度化，技術革新を通じてわが国経済のあらゆる部門にわたって構造的変化を生み出して行った[29]。中でも大島紬のような古くからの伝統を持つ停滞的消費財産業に大きな影響を及ぼしたのは労働力需給構造の変化である。伝統的消費財産業の多くは，その技術的特性もさることながら，何よりもまず豊富に存在するチープ・レーバーにその存立基盤を置いていた。しかし，産業構造高度化の波は，これら伝統的消費財産業群の存立基盤を根底から揺さぶったのである。すなわち，その第一は若年労働力の雇用が高成長部門の大企業に集中し，中小企業では若年労働力を中心に人手不足が深刻化してきたことである。従来も奄美群島は雇用機会の少なさに加えて労働条件の劣悪なところから，本土に対する若年労働力の重要な供給源として位置づけられてきたが，産業構造の高度化は一層その機能の遂行を強要することになった。特にこの時期における本土企

業の積極的な求人攻勢はすさまじく，ために若年労働力は根こそぎ本土へ流出してしまい，地元の求人難は年毎に深刻化して行った。そのような事態の進展につれて，大島機業では代替労働力としての農家の主婦労働力を求めて急速にまた広範に農山村に進出して行ったが，こうした労働力の確保難は必然的に賃金の大幅な上昇をもたらすことになった。

機械制工業であれば，賃金上昇分を生産性の向上で吸収することも可能であるが，大島紬のように労働集約的で生産性の低いものは，それによってカバーすることが困難である。従って賃金上昇は必然的に製造単価の上昇となり，最終的には消費者価格にハネ返ることにになる。

しかし，経済の高度成長は，こうした人件費の上昇を招きつつも，一方において消費水準の向上，消費生活の多様化をもたらし，それはまた「民芸品ブーム」を引き起こした。大島紬は，この「民芸品ブーム」に幸いされて，賃金上昇→消費者価格上昇というコースを繰り返しながらも増産の一途を辿ることができた。しかし，その間「作れば売れる」という安易感があったことは否定できず，従って企業合理化に対する努力が欠如していたこともまた事実である。それが必要以上に消費者に負担をかけることになり，結果的に「韓国産紬問題」を惹起させたのである。

「韓国産紬問題」とは「本土の大手商社の資本と韓国の安い労働力などで紬を大量生産し，それを安価に日本市場で流通」させることを狙って，名瀬市内の大手紬業者に本土有数の大手商社や京都の呉服商から韓国への技術提携や生産提携の申入れがあったことに端を発し，それを受けて業者の中から実際に韓国に原料と技術を持ち出し，製織させるようになったことを言うが，当時製織加工賃が日本の半分から3分の1といわれた韓国の低賃金労働者を使ってのことであったから，大島紬を生命産業としている奄美産地に与えた影響は計り知れないものがあった[30]。以後，奄美産地ではそ

の対策に大いに悩まされ，また苦難の時代が続いたが，幸いに最近における韓国労働賃金水準の上昇で紬生産のメリットが減退し，この問題は沈静化してきている。しかし，企業が資本の論理に立って行動する限り，第二，第三の「韓国産紬問題」が生ずるのは避け難く，企業の利権追及と産地全体の利益擁護との間の矛盾は，なお解消されないまま継続して行くものと思われる。

5．歴史に学ぶ問題点の所在と教訓

以上，各産地における産業としての生成と展開過程を概観してきたが，それを通してわれわれは多くの問題点の所在と，また教訓を学びとることができる。いま，その中の主要なものを列挙すれば次の通りである。

(1) 粗製濫造問題

本稿では明治初期における久留米絣の場合だけしか掲げていないが，業者が目先だけの利益に囚われて，事有るごとに粗製濫造に走るのは，時代の新旧，洋の東西を問わず，何処の産地にも見られる通弊である。博多織，大島紬においても多々その例が見られる。たとえ少数者といえども，彼等のかかる行為が，如何にその産地の信用を傷つけ，また回復に長年月を要するかは論ずるまでもない。常に，業界団体を中心にその防止策を講じ，また，徹底しておく必要がある。

(2) 特定品種への製品特化とその反動

同じ伝統織物でありながら，戦前・戦後を通じ，西陣織は常に博多織より優位にたっていた。それは博多織が平地を主体としてきたのに対し，西

陣は紋織を主に生産しているだけに品種やデザインに多様性を持っていたからである。そこで西陣産地に対抗するために開発されたのが，「厚手」という博多織の特性を生かした新製品の「八寸なごや帯」であった。この商品の出現で，博多織は実質的年率10%の割合で急成長し[31]，また，産地内におけるこの帯のシェアーも年々拡大して行った。しかし，こうした或る一定品種への特化は，消費構造の変化で当該製品に対する需要が停滞するようになった時，逆に大きな負担となってくる。博多織の「八寸なごや帯」，中でもその主流を占めていた「紋八寸なごや帯」は，高度経済成長後の消費抑制の煽りを受けて，それが「おしゃれ着」であっただけに，需要は急激に減少して行った。当然，代替商品の開発ないし転換が必要となるが，その代替商品として考えられたのが「着物離れ」の影響が比較的少ないフォーマル用としての，そしてまた，付加価値の高い「袋帯」であった。しかし，この分野では博多が「八寸なごや帯」に特化している間，すでに西陣が強力な地位を築きあげていたので，その転換は容易なことではなかった。こうして主力商品を見出せないまま博多織産地は低迷を余儀無くされることになったのである。

(3)　高級品生産への傾斜問題

同じようなことは商品の品種展開についても言い得ることである。所得水準，生活水準の上昇とともに，消費者の志向は「高級品志向」「本物志向」へと変わり民芸品ブームが起こったことは既に述べた。

伝統的織物産地でも，この時代は「作れば売れる」時代であった。量的拡大はもちろんのこと，品質的にも付加価値の高い，利益の取れる高級品へと傾斜して行った。

こうした社会的背景に加え博多織，大島紬の場合はさらに

① 国内生糸生産者保護を目的に生糸に対し高価格維持政策が取られ，原料高であったこと

② 高度経済成長時代の若年労働者不足による賃金高騰

などが重なって[32]，付加価値の高い高級品化への傾斜を一層高めて行ったのである。

しかし，一たびブームが去り，消費構造が変化してくると高級品であればあるほど，またその後遺症も大きくなってくる。生産と消費との間には常にタイムラグがあるので，作ったもののうち相当数のものが不良滞貨として売れ残り，滞貨削減への努力と，その時間的経過の間に生産者・流通業者の受けた打撃・損害は計り知れないものがあった。

高級品生産への傾斜は社会的・経済的背景の中では，ある程度は容認できる。しかし，その間にあっても，常に需要の動向を的確に把握して置くことが重要である。また，そのための情報収集と分析が欠かせないものとなってくる。

消費者心理は複雑で微妙である。消費動向は常に変化し一瞬も停滞することはない。従って，それに対処するためには，的確な情報の収集，それも先取りの形で収集し，分析することが肝要である。要は消費者が何を望んでいるか，を的確に把握すること，また生産に当たっては常に消費者側からの視点が必要だということである。

(4) 問屋依存の体質

『博多織流通実態調査報告書』（九州経済調査協会，1966年）によると，博多織は問屋支配が強固であり，また，生産者の方も問屋への依存度が高いという。同様のことは，『大島紬流通実態調査報告書』（鹿児島県，昭和46年）他，諸種の調査でも明らかにされている。こうした問屋依存体質は

小零細生産者の多い伝統的織物業の場合，免れ得ない特質といえるし，また，生産者にとってもそれなりの利点があることは否定し得ない。しかし，反面こうした体質の過剰は生産者の競争力を失わせ，自立性と革新性を阻害するものとなる。事実，博多織についての意識調査で「産地問屋支配が強く，機屋は商品づくりの主義主張をなくしている」，「新しい試みやデザインが生まれないのは，機屋間での競争がないからでは」，あるいは「同業者間での厳しい競争が見受けられない」[33]などの評が見られるのも，問屋依存体質の強いことを反映したものと言えよう。

(5) 保守的体質の内在とその払拭

博多織が，徳川時代，福岡藩によって幕府への献上品として指定されたところから藩による保護統制が行われたことは既に述べた。こうした保護統制を基に継続・維持されてきた博多織は，無意識のうちに企業体質として上記の問屋依存と，ここでの保守的性格を内在させるようになったと思われる。

いうまでもなく，保守的性格は現状を肯定し，改革を躊躇するものである。博多織は明治初年以来，度重なる社会的激変の中で，その消長を共にしてきたが，その業種の性格から最も景気の影響を鋭敏に受け易い体質でありながら，その体質改善のための有効な方策が取られたとは言い難い[34]。従って博多織が低迷を免れ，存続を図るためには，こうした保守的体質を払拭し，抜本的自己改革を行う必要がある。例えば，帯地一辺倒からの脱却による多品種化と，問屋依存の製品製作から離れ，各業者が独自の製品の企画並びに開発力を持つような体質の強化[35]といったものがそれである。

(6) 需要構造変化に対するマーケティング戦略の不足

今日，わが国人口の大半は昭和生まれの年代によって占められ，また生活様式も，いわゆる近代化の進展で衣食住の全般に亘って大きく変化し，それに応じて消費財の需要構造も変化してきた。

われわれの当面の対象である衣生活に限ってみても，戦後の急速な洋装化の進展は日常生活からの“着物離れ”を生じ，こうした“着物離れ”は当然のことながら普段着，街着としての和装の存在意義を減少させ[36]，僅かにフォーマルな面（冠婚葬祭用，儀式用）でのみその命脈を保つに過ぎなくなっているのである。しかし，これとても洋式婦人服のフォーマル市場への進展とその驚異的な拡大によって，今後ますます和装市場は侵害され，危機的状況[37]に陥れられるのは疑い得ないところである。

ところで，すでに見たように，普段着，作業着としての久留米絣は，高度経済成長が始まる以前に衰退の兆しを見せ，また，おしゃれ着としての高級織物である大島紬，あるいは博多織も民芸品ブーム，高級品志向に助けられて，昭和50年代までは何とか存在意義を見せたものの，以後は長期低落傾向にある（第1図参照）。

こうした事態に応じて，各産地はどのような対応策を講じたであろうか。「『死児の齢を数える』愚痴を敢えて繰り返せば，この時期に久留米絣業も業者単位の規模の大きさを利用して，業者ごとの生産販売一貫方式を確立し，かつそれぞれのブランドを構築していく方向に絣業の展開をはかっておれば今日の窮状は回避できないまでも今日の隘路の打開はまだまだ容易になっていたかもしれない。がしかし当時の久留米絣業は，これまた当時の繊維産業の弊風に身を委ねたままであった。和装使用を主体とする着尺地の生産に終始した。これは即和装の消長にその運命を同じくすることになるが，いまやその事態が実現した観がある。」との小森俊介氏の指摘が

あるように[38]，久留米絣産地に限らず，大島紬，博多織産地でも同様に，着尺地や帯地としての新製品の開発や新デザインの開発，あるいは新市場の開拓などといった中・短期的マーケティング戦術は取られても，衣料品産業としての長期的展望に立った基本戦略の構築は，今日から振り返ってみると殆どなされていなかったと言わざるを得ない。

今後伝統的織物業が進むべき方向の一つとして考えられるのは二次製品としてのアパレル産業化である。洋装化の進展に応じて単なる着尺地や帯地としてではなく，洋服の素材としての，すなわちアパレル製品への転換がそれである。勿論先駆的業者の中には，既にこうしたものへの取り組みを行い，また各県の業界団体や工業試験場でも試作品などの製作に尽力しているが，未だ，産業化というところまでには至っていない。明らかに危機的段階が迫ってから取り組みを開始したという，その時期的遅れが響いているのである。

ライフサイクル論をまつまでもなく，全ての商品には必ず衰退期が訪れるものであり，それが必然的であればあるほど好況期に，既にその時のことを考え製品転換などの対応策を練っておくべきであった。結果論になるが，各産地ともこうしたことへの欠如，あるいは対応の遅れが今日の苦境を招いたと言っても過言ではなかろう。

7．おわりに

登山者が道に迷った時，元の地点まで引き返すことは遭難を免れるための山人の鉄則である。同様に地場産業も，現在の有りようを問い質し，将来の進路を定めるには，当該産業の創立原点に戻って，その辿った道を改めて再点検することが必要である。

「一体に地場産業は地域に住んでいる人たちの衣食住という物質的生活の充足の必要性を母とし，民衆の生活の知恵・職人の工芸へと高めようとする熟練労働技術を父として形成されたものである」[39]というように，地場産業はその地域に必要なものを製造し，それが時の流れと共に域外へと市場を拡大して行ったところから始まる。そしてその際何よりも重要なことは，地場産業成立と市場の拡大は消費者の需要と当該産業の製品が品質的・価格的に合致したからに他ならない，ということである。ところが，こうした当然のことが産業展開の過程で往々にして忘れられがちである。「今日までの博多織業界は，最終消費者志向などは，あまり，必要なかった。あるのは，『問屋』と『銀行』と『相場』（生糸相場）でしかないといっても過言ではなかった」[40]との述懐などは如実にそのことを物語っている。こうした消費者に背を向けた行為が産地における今日の悲劇を招いているのは今さら説明するまでもない。一般的に言って，消滅衰退する産業は多分に構造的な面もあるが，消費者視点の欠如に負うところが大きいことは多くの事例が証明している。

そこで，現在の産地が行わなければならないことは，消費者の望む製品を間違いなく供給しているかどうか，を改めて問い直し，場合によっては業種転換も視野の中に入れて，再出発への方向を見定めるということである。

〈注〉

(1) 博多織の起源については，杉原実著『博多織史』（校倉書房，昭和39年）に詳しい。

(2) 杉原実『博多織史』校倉書房，昭和39年，47ページ。

(3) 山崎藤四郎編『石城遺開』名著出版，昭和48年，下巻23ページ。

(4) 杉原実著『前掲書』145ページ。

(5) この井上伝創始説についての疑問がないわけではない。詳細については，福井貞

子著『図説日本の絣文化史』(京都書院，昭和48年) 13ページを参照されたい。

(6) 日本伝統産業研究所編『日本の伝統産業〈工芸編〉』通産企画調査会，昭和51年，419～420ページ。

(7) 久留米絣技術保存会編『久留米絣』久留米絣技術保存会，昭和44年，12ページ。

(8) 坂口徳太郎編『奄美大島史』三州堂書店，大正6年，460ページ。

(9) 福井貞子『図説日本の絣文化史』京都書院，昭和48年，7ページ。

(10) 浅田猛「博多織工業おぼえがき (II)」125ページ。(『折尾女子経済短期大学論集第14号』1979)。

(11) 浅田猛「前掲論文」126ページ。

(12) 久留米絣保存会編『前掲書』13～14ページ。

(13) 金原達夫著『大島紬織物業の研究』多賀出版，1985，19ページ。

(14) 九州経済調査協会『博多織流通実態調査報告書』1966，59～60ページ。

(15) 九州経済調査協会『同上書』59ページ。

(16) 九州経済調査協会『同上書』60ページ。

(17) 久留米絣技術保存会編『前掲書』14ページ。

(18) 久留米絣技術保存会編『前掲書』14ページ。

(19) 久留米絣技術保存会編『前掲書』14ページ。

(20) 金原達夫『前掲書』14ページ。

(21) 九州経済調査協会『前掲書』62ページ。

(22) 福井貞子著『前掲書』16ページ。

(23) 金原達夫著『前掲書』18ページ。

(24) 九州経済調査協会『前掲書』63ページ。

(25) 九州経済調査協会『前掲書』4ページ。

(26) 九州経済調査協会『前掲書』4ページ。

(27) 九州経済調査協会『前掲書』3ページ。

(28) 九州経済調査協会『九州地場産業の現状と課題 (下巻)』146ページ。

(29) 藤田敬三・竹内正己編『中小企業論』151ページ，有斐閣双書。

(30) 高向嘉昭「産業構造変革と伝統産業 (大島紬)」(鹿児島県立短期大学『商経論叢』第20号，昭和46年) 86ページ。

(31) 博多織元卸商業組合『博多織元卸商業組合三十周年記念誌』，創思社，昭和55年，50～51ページ。

(32) 九州経済調査協会『博多織流通実態調査報告書』1966，11ページ。

(33) 博多織工業組合『博多織活性化ビジョン報告書』平成5年，38ページ他。

(34) 博多織元卸商業組合『前掲記念誌』83～84ページ。

(35) 博多織元卸商業組合『前掲記念誌』79～80ページ。

(36) 博多織元卸商業組合『前掲記念誌』85～86ページ。

(37) 博多織元卸商業組合『前掲記念誌』88～89ページ。

(38) 九州経済調査協会『九州地場産業の現状と課題（下巻)』146ページ。

(39) 下平尾勲『現代地場産業論』新評論，1985，5ページ。

(40) 博多織元卸商業組合『前掲記念誌』34ページ。